

## 劉基『郁離子』訳註(一)

李 蕾

## 訳註説明

『郁離子』は、元末明初の儒者の劉基が作成した寓言書である。成立時期は元至正十七(一三五七)年と思われ、元末における劉基の思想の実態、およびその時期の社会状況が反映される。元末明初の歴史、特に思想史研究にあたって貴重な史料と考えられる。『莊子』・『韓非子』から始まった寓言の伝統を引き続け、物語を通じて政治的、または哲学的な論理を組み立てる『郁離子』は、各種類の技法を活かして、豊かな表現が与えられる。文学の名作としても一席を占めているであろう。しかも『郁離子』は歴史から取材し、前人が語っていた歴史人物や事柄でも、新たに敷衍し、斬新な解説を施し、古代の寓言を乗り越える集大成と言っても過言ではない。

続いては『郁離子』の版本を説明しておきたい。大別すれば、『郁

離子』には単行本と文集本がある。単行本にはまた全本と略本(基本的に叢書本。例えば陶宗儀の『說郛』所収本、明嘉靖三十三年鄭梓の『明世學山』所収本、明萬曆二十二年王文祿の『百陵學山』所収本)に分けられ、以下は全本を中心に説明する。

『郁離子』の単行本に、明洪武十六年の劉基「行状」によるとは十卷本、明成化六年楊守陳の「重録誠意伯文集序」によるとは五卷本、明隆慶六年何鐘の「重刻誠意伯劉公文集序」によるとは四卷本がある。しかし五卷本と四卷本は現存しておらず、十卷本だけは『北京大學圖書館藏古籍善本書目』に「明弘治刻本 四冊 11.6/72411」が著録され、北京大學図書館に所蔵しているそうである。残念ながら、筆者はまだその十卷本を閲覧できず、これ以上説明しかねる。単行本にはまた二卷本があり、明嘉靖三十五年刻本の『劉宋二子』本、明萬曆年間刻本の『括蒼二子』本、清嘉慶十年張海鵬の『學津討原』本や清同治十三年活字印本の『榕園叢書』本が数えられる。

単行本以外は文集本であり、つまり劉基の詩文集に収載されたも

のである。その中にも、詩文集の版本系統により、二つの種類に分別できる。そのため、劉基詩文集の二つの版本系統を説明しておく。

第一は、内容をそれ以前成立した単行本のままにして、ある順番でまとめた所謂「合集本」である。この系統には、成化六年（一四七〇）本・正徳十四年本（一五一九）。成化六年本による翻刻したと思われるが、多少調整がある）・嘉靖七年本（一五二八）。正徳十四年本の修補本）がある。現存する最も早い版本の成化六年本によると、『誠意伯文集』は二十巻であり、巻一は「翊運録」、巻二から巻四は「郁離子」（三巻に合わせた）、巻五から巻十四は「覆瓿集」、巻十五から巻十六は「犁眉公集」、巻十七から巻十八は「写情集」、巻十九から巻二十は「春秋明経」である。後に刊行された合集本は、形式も内容も成化本と同じであり、ただ各部分の順番を調整し、内容をやや増補した。『四庫全書』所収本もこの系統に所属する。

第二の系統は嘉靖三十五年（一五五六）本から主流になった十八巻の「類編本」である。この系統の『誠意伯文集』に、元の単行本の痕跡が完全に見えなくなり、詩と文は各体裁・種類で並べてある。『四部叢刊』の底本である隆慶六年（一五七二）をはじめとする嘉靖本以降に刊行された『誠意伯文集』はすべて嘉靖本の形式に従い、その内容も継承したものである。この系統の版本には、「郁離子」

が一卷（巻二）にされる。

本稿は、現存するもつとも早い版本の成化六年本『誠意伯劉先生文集』にある「郁離子」（巻二から巻四）を底本とし、<sup>1)</sup>「合集本」の正徳十四年本（「正徳本」と略称）・嘉靖七年本（「嘉靖甲本」と略称）、および「類編本」の嘉靖三十五年本（「嘉靖乙本」と略称）・隆慶六年本（「隆慶本」と略称）を参照し、校勘を行う。他の資料を参照し、難解な字句に対して注を施す。現代語訳は白帝社より二〇〇七年に出版された鈴木敏雄氏の『郁離子全訳』も参考にした。

## 巻之一

### 千里馬（千里の馬）第一 1.01

原文

郁離子之馬、竇得馱駝焉。人曰：「是千里馬也、必致諸内廐」。郁離子説、従之。至京師、天子使太僕閱方貢、曰：「馬則良矣、然非冀産也。」置之于外牧。

南宮子朝謂郁離子曰：「熹華之山、實維帝之明都、爰有紺羽之鵠、拖而弗朋、惟天下之鳥、惟鳳爲能、履其形。於是道鳳之道、志鳳之志、思以鳳之鳴鳴天下、爽鳩見而謂之曰：「子亦知夫木主之與土偶

(1) 筆者の考証によると、成化六年本はそれ以前成立した単行本をまとめたとき、その内容を忠実に載せているため、現状では成化六年本が最も信頼性の高いテキストを提供するものである。拙稿「元代における劉基の境遇と華夷思想」を参照、「三国志研究」第二十号（二〇二五年）。

乎？上古聖人以木主事神、後世乃易以土偶。非先王之念慮不周於今之人也、敬求諸心誠、不以貌肖。而今反之矣。今子又以古反之。弗鳴則已、鳴必有戾。」卒鳴之。咬然而成音、拂梧桐之枝、入于青雲、激空穴而殷巖峽、松・杉・柏・楓莫不振柯而和之。横體豎目之聽之者、亦莫不蠢蠢焉、熙熙焉。

「驚聞而大惕、畏其挺己也。使鸚諛之于王母之使曰：「是鵠而奇其音。不祥。」使鴝日逐之。進幽昌焉。鵠委羽于海濱。鷓鴣遇而射之、中脰幾死。今天下之不内、吾子之不爲幽昌而爲鵠也、我知之矣。」

訓読

郁離子の馬、孿して馱駝を得たり。人曰く、「是れ千里の馬なり。必ず諸を内廐に致せ」と。郁離子 説びて、之に従う。京師に至り、天子 太僕をして方貢を聞せしめ、曰く、「馬は則ち良し、然れども冀の産に非ざるなり」と。之を外牧に置く。

南宮子朝 郁離子に謂ひて曰く、「熹華の山は、実に維れ帝の明都なり。爰に紺羽の鵠有り、菴して朋とせず、天下の鳥にして、鳳のみは能ふと惟ひ、其の形を履ぐ。是において鳳の道を道とし、鳳の志を志とし、思うに鳳の鳴きを以て天下に鳴かんとす。奭鳩 鳩見て之に謂ひて曰く、「子 亦た夫の木主と土偶を知るか。上古の聖人は木主を以て神に事え、後世 乃ち易えて土偶を以てす。先王の念慮、今の人に周からずんばあらず、敬みて心の誠を求め、貌を肖らず。今は之を反す。今、子もまた古を以て之を反す。鳴かざん

ば即ち已まん、鳴かば必ず戾有らん」と。卒に之を鳴く。咬然として音を成す。梧桐の枝を拂ひ、青雲に入り、空穴を激しくして巖峽に殷き、松・杉・柏・楓 柯を振て之に和はざるは莫し。横體豎目してこれを聴く者、亦た蠢蠢として熙熙たらざる莫し。

「驚 聞きて大いに惕れ、其の己を挺むる（地位を奪い取るの）を畏る。鸚をして王母の使に諛せしめて曰く、「是れ鵠にして其の音を奇とす。祥ならず」と。鴝をして日に之を逐はしむ。幽昌をして進めしむ。鵠 羽を海濱に委ぬ。鷓鴣 遇ひて之を射、脰に中たりて幾と死せり。今、天下の内れざるところ、吾が子の幽昌と爲さずして鵠と爲るを、我れ 之を知る。」と。

註

- (一) 横體豎目…動物を指す。「明」陶望齡『歇庵集』卷二「放生詩十首……（其九）」には「豎首横目人、豎目横身獸」とあり、「横體豎目」は「豎目横身」と同じく動物を指すであろう。前句の松・杉などの植物にも対応している。
- (二) 幽昌…神鳥。「後漢」許慎『說文解字』卷四上には「鷓、鷓鴣也。五方神鳥也。東方發明、南方焦明、西方鷓鴣、北方幽昌、中央鳳皇……」とある。「後漢書」志第十四 五行二 注は「葉圖徵曰、似鳳有四、並爲妖……四曰幽昌、兎目、小頭、大身、細足、脛若鱗葉。身智、戴信、負禮、膺仁、至則旱之感也」とある。

- (三) 鷓鴣…人に射られた時、矢を受け止め、返して人に矢を放す鳥。「爾雅」釋鳥には「鷓鴣、鷓鴣、如鷓。短尾。射之、銜矢射人」とある。

現代語訳

郁離子の馬が、子を産むと、名馬であった。人は、「これは千里の馬です。早速朝廷に献上してください」と言った。郁離子はこの言葉に従い、喜んで馬を連れて都へ上った。到着すると、天子は地方からの献上品を検査しようと（馬の管理担当の）太僕に任せ、太僕は、「良い馬ですが、（北方の）冀の産物ではございません」と言った。結局（この馬は）宮廷外の牧場に放ってしまった。

南宮子朝は郁離子に言った、「熹華という山は、そもそも南方天帝の炎帝の都でした。そこには紺羽の鵠がおります。この鵠は生まれから他の鳥と群れにならず、天下の鳥の中ではただ鳳凰だけが優れると思つて、鳳凰の真似をしていました。だから（鵠は）鳳凰の道を辿り、鳳凰の志を自らの志とし、鳳凰の鳴き方で天下を聞かせようと考えました。爽鳩は（鵠の有り様を）見て、「君は木主と脩の關係が分かっているか。古代の聖人が木主で（鬼）神を崇め、後世はそれを脩に変えた。（脩は木主より形が神に近いとはいってもないが）古代の先王の考えは今の人ほど周到ではないというわけがない。彼ら（古代の先王）は謹んで心の誠意を求め、形を似せることはしなかったからだ。今の君はそれが逆になっているが、君はまた昔に戻そうとしている。鳴かなければ無事だとしても、鳴けば必ず罪を買う」と言ってくれましたが、とうとう鳴つて、きれいな音を出しました。その音は梧桐の枝を拭き、雲まで届き、洞穴や断崖を響かせました。松や杉や柏や楓など、枝を振って共鳴しない

植物はなく、動物たちもすべて騒いで興奮しました。

鶯は（鵠の鳴き声を）聞いて驚き、自分の地位が奪い取られるのを恐れました。彼は鶯を使って王母の使者に告げ口させ、「この鵠の鳴き声は奇妙です。これは不祥です」と言わせました。そこで（王母は）毒鳥の鴆（鳩）に日々に鵠を追いかけるうと任せました。しかも（鶯は）幽昌を（王母に）推薦しました。鵠は海辺で（休憩に）羽を垂れると、鵠鷄に遭い、彼に矢を射られ、頸にあたって危うく死ぬところでした。

今、朝廷があなたを受け入れないのは、あなたが幽昌ではなく鵠の有り様をしているためです。私には分かりません。」と。

憂時（時を憂ふ） 102

原文

郁離子憂。須臾進曰：「道之不行、命也。夫子何憂乎？」郁離子曰：「非爲是也。吾憂夫航滄溟者之無舵工也。夫滄溟、波濤之所積也、風雨之所出也。鯨・鯢・蛟・蟹於是乎集。夫其負鋒鋌而含銛鏑者、孰不有所俟？今弗慮也、且夕有動、子將安所適乎？」須臾曰：「昔者太冥主不周、河洩于其岫、且泐。老童過而憚之、謂太冥曰：『山且泐。』太冥怒、以爲妖言。老童退、又以語其臣、其臣亦怒曰：『山豈有泐乎？有天地則有吾山、天地泐、山乃泐耳。』欲兵之、老童憚而走。無幾、康回過焉、弗肅、又弗防也。康回怒、以頭觸其山、山之骨皆氷裂、土墮于淵、沮焉。太冥逃、客死于昆侖之墟、其臣皆亡

厥家。今吾子之憂、老童也、其若之何？」

## 校勘

〔一〕「氷」、諸本は「水」に作る。

## 訓読

郁離子 憂ふ。須麋 進みて曰く、「道の行はれざるは、命なり。夫子何を憂へんか」と。郁離子曰く、「是の為に非ず。吾が憂ふるは、滄溟を航る者の舵工無きことなり。夫れ滄溟は波濤の積む所、風雨の出づる所なり。鯨・鯢・蛟・蜃 是に於いて集まる。夫れ其れ鋒鋌を負ひて鈍鏑を含む者、孰か俟つ所無からんや。今これを慮らざるば、且夕動くこと有らば、予は將た安くにか適かるや」と。

須麋曰く、「昔者、太冥 不周を主とす。河 其の岫は洩れて且に渤けんとす。老童過ぎてこれを惴れ、太冥に謂ひて曰く、「山且に渤けんとす」と。太冥怒りて、以て妖言と為す。老童退きて、また以て其の臣に語ぐ。その臣も亦た怒りて曰く、「山豈に渤くること有らんや。天地有らば則ち吾が山有り、天地渤けば、山乃ち渤かんのみ」と。之を兵たんと欲す。老童愕きて走る。無幾も無くして、康回 焉に過ぎ、（太冥）肅まず、又た防がず。康回怒りて、頭を以てその山に觸る。山の骨皆氷のごとく裂れ、土淵に墮ちて、沮す。太冥逃げ、昆崙の墟に客死す。その臣 皆 厥の家を亡へり。今吾子の憂ふるは、老童なり。其れ之を若何せんや」と。

## 註

（一）老童・顓頊の子、祝融の父と言われる。「山海經 大荒西經」には、「有崑崙、其上有人、號曰太子長琴。顓頊生老童、老童生祝融、祝融生太子長琴」とある。

## 現代語訳

郁離子は心配していた。須麋が（郁離子に）言った、「道が実現されないのは、宿命です。先生は心配する必要がありません。」と。郁離子は、「（私は）それを心配しているではありません。海を渡っているのに舵取りがないことを心配しています。海は、大波が逆巻いて、風雨が荒れるところです。そこには雄鯨・雌鯨・みずち・大蛤が集まっています。これらが鋭い武器と気迫を持って、得物を待っています。予め準備しなければ、一旦動くとなると、私はどこに行けばいいのですか。」と。

須麋は言った、「昔、太冥が不周山の主人であった時、河の水が山の穴から漏れ出て山にひび割れが入りました。老童が通り過ぎて恐れ、（太冥に）「山にひび割れが入っています。」と言いました。太冥は怒り、それが人を惑わす怪しげな言葉と考えてしまいました。老童は退いて、太冥の臣下にも言いました。その臣下も怒り、「山にひび割れが入るわけあるかい。我が山は天地とともに存在してきたものだ。天地にひび割れが入る限り、山にはひび割れが入れる。」と。臣下は武器で老童を打とうとすると、老童は驚いて逃げました。

ほどなく、康回が通り過ぎましたが、太冥は敬いもせず備えもしませんでしたので、康回は怒り、頭を山に叩き込みました。(山の骨の)石が氷のように砕け、土が崩れ落ちて淵に埋もれ(川を)詰めました。太冥が逃げましたが、結局昆崙の丘で死にました。その臣下も皆家を失ってしまいました。今先生のご心配は、まるで老童のようです。致し方ないことです。」と。

### 戚之次且(戚之次且) 103

原文

戚之次且謂郁離子曰：「子何謂其垂垂也與？子非有願欲於今之人也、何爲其然也？」郁離子仰天歎曰：「小子焉知予哉。」戚之次且曰：「昔周之姬冶子早喪其父、政屬於家僮、沸用賄、於是家日迫、將改父之舊。其父之老不可、僮群詢而出之。其母禁之、僮曰：「老人不知死而弗自靖也。」夫以其父之老與其母之言且不聽也、而況於疏遠之人乎？憂之何補？祇自瘳也。」郁離子曰：「吾聞天之將雨也、穴蟻知之。野之將霜也、草蟲知之。知之於將萌、而避之於未至、故或徙焉、或蟄焉、不虛其知也。今天下無可徙之地、可蟄之土矣、是爲人而不知蟲也。詩不云乎：「匪鶉匪鳶、翰飛戾天。匪鱸匪鮪、潛逃于淵。」言其無所往也。吾何爲而不憂哉？」戚之次且曰：「昔者孔子以天縱之聖而不得行其道、顛沛窮厄無所不至、然亦無往而不自得。不爲無益之憂以毀其性也。是故君子之生於世也、爲其所可爲、不爲其所不可爲而已。若夫吉凶禍福、天實司之、吾何爲而自瘳哉？」

校勘

「一」「謂」、正徳本以降の諸本は「為」に作る。

「二」「藥」、嘉靖本以降の諸本は「孽」に作る。

訓読

戚之次且せきしじよ、郁離子に謂ひて曰く、「子何為れぞ其の垂垂たるや。

子は今の人に願欲すること有らざるに、何為れぞ其れ然るや。」と。

郁離子、天を仰ぎて歎じて曰く、「小子焉ぞ予を知らんや。」と。

戚之次且曰く、「昔、周の姫冶あやし子は早く其の父を喪ひ、政は家僮に

属し、沸くがごとく賄を用い、是に於いて家日々に迫り、將に父の

旧を改めんとす。その父の老は不可とし、僮群のりがり詢りて之を出

だす。其の母之を禁ずるも、僮曰く、「老人は死を知らずして自

ら靖はからざるなり」と。其の父の老と其の母の言を以て、すら且つ聽

かず、況んや疏遠の人をや。憂うるは何の補ひや。祇だ自ら瘳いたむの

み」と。郁離子曰く、「吾聞くならく、天の將に雨降らんとする

ときは、穴蟻之を知り、野の將に霜降らんとするときは、草虫

之を知ると。將に萌もんとするに於いて之を知り、未だ至らざるを避

く。故に或いは徙り、或いは蟄し、其の知を虚しくせず。今、天下

に徙るべき地も蟄すべき土も無く、是れ人と為りて虫にも如かざる

なり。詩に曰く、「匪の鶉たん、匪の鳶えん、翰く飛んで天に戻るに。匪の

鱸えん、匪の鮪ひ、潜みて淵にも逃るるに」と。その往く所無きなりを言

ふ。吾何すれぞ憂へざらんや」と。戚之次且曰く、「昔者、孔子は

天の縦する聖を以て其の道を行うことを得ず、顛沛窮厄、至らざる無きも、然れども亦た往く所自得せざることを無し。無益の憂ひを為して其の性を毀たず。是の故に君子の世に生きるは、其の為す可き所を為し、為す可からざる所を為さざるのみ。若し吉凶禍福は、天 実に之を司り、吾 何為れぞ自らを棄（わざは）ひすや」と。

註

（一）『詩經』小雅 四月からの引用である。訓読は石川忠久『詩經』（新釈漢文大系第110巻）に従う。

現代語訳

戚之次且が郁離子に言った、「あなたは どうして そう 憂える でしょうか。今の 人に 何を 期待 している は ずが ない のに、 どうして そう なの ですか。」と。郁離子は 天を 仰ぎ 見て 嘆き、「君は 私を 分かって いない。」と 答えた。戚之次且は、「昔、周の 姫治子 は 早く に 父が 亡く なって しまい、 家政を 召使に 任せ ました。 家財が 盛んに 浪費 され、 家は 日ごと に 生活に 追われ、 かつて 父の あり方 を 改め ざる を 得 なくなりました。（父に 仕えた） 老人は この ままだ と ダメだ と 言った のですが、 召使は この 老人を 罵って 追い 出しました。（姫治子の） 母も それを 禁じ ましたが、 召使は 「ご 老体は 死に そう と も 知らず、 余計 な こと を なさ なければ なら ませ ぬね。」と 言った。（姫治子は） 父に 仕えた 老人 や 母の 言葉 さえ 聞こう と し ませ ぬ、 疎遠 な もの の 言

葉ならばなおさらです。憂えても何になりますか。自分の苦痛を増やすだけです。」と。

郁離子は言った、「私は、天が雨を降らそうとする時、穴にいたりあるいはそれが分かり、野に霜が降りそうな時、草むらに居る虫はそれが分かると聞いた。何か（悪いこと）が発生しようとする時にそれを予見し、予め（災いから）避けるということだ。だから居場所を変えたり土に潜ったりして、その予見を無駄にしない。今のところ、天下には移るべき場所も潜るべき場所もなく、人は虫にも及ばない。『詩經』に「あの鶉やあの鳶は、高く天に至る（ことができ）る）のに……あの鯉やあのなますは、潜んで淵に逃れるのに……」というの、自分には行ける場所がないとのことだ。私はどうして憂えないでいられようか。」と。戚之次且は、「昔、孔子は天より認められた聖人でありながら、彼の道を行うことができませんでした。そのうえ、様々な災いにも遭いました。しかし孔子はどんな状況でも自得していました。無益に憂えず、自分の性に損害を与えないためです。そのため君子は、世に命を寄せるところ、すべきことをし、すべきでないことはしない、それだけです。吉凶禍福ならば、それは天が支配しています。どうして（憂えて）自分に禍いを招くのでしょうか。」と。

原文

郁離子謂執政曰：「今之用人也、徒以具數與、抑亦以爲良而倚以圖治與？」執政者曰：「亦取其良而用之耳。」郁離子曰：「若是、則相國之政與相國之言不相似矣。」執政者曰：「何謂也？」郁離子曰：「僕聞、農夫之爲田也、不以羊負軛。賈子之治車也、不以豕駟服。知其不可以集事、恐爲其所敗也。是故三代之取士也、必學而後入官、必試之事而能然後用之。不問其系族、惟其賢、不鄙其側陋。今風紀之司、耳目所寄、非常之選也。儀服云乎哉？言語云乎哉？乃不公天下之賢、而悉取諸世胄昵近之都那豎爲之、是愛國家不如農夫之田、賈子之車也。」執政者許其言、而心忤之。

訓読

郁離子 執政に謂ひて曰く、「今の人を用ふるは、徒に数を具ふるを以てするか、抑は亦た良と爲すを以て倚りて以て治を図るか。」と。執政者曰く、「亦た其の良を取りて之を用ふるのみ。」と。郁離子曰く、「是の若くんば、則ち相國の政と相國の言と相似ず。」と。執政者曰く、「何をか謂ふや。」と。郁離子曰く、「僕聞くならく、農夫の田を爲すは、羊を以て軛を負はしめず。賈子の車を治むるは、豕を以て駟服せしめず。其の以て事を集す可からざるを知り、其の敗るる所と爲るを恐るなり。是の故に三代の士を取るは、必ず學びて後に官に入り、必ず事に試みて能くして然る後に之を用ふ。其の

系族を問はず、ただ其の賢なるを惟ひ、其の側陋を鄙しまず。今、風紀の司、耳目の寄る所にして、非常の選なり。儀服をば云わんや、言語をば云わんや。乃ち天下の賢を公とせずして、悉く諸々の世胄の昵近より取り、都の那豎を爲すは、是れ國家を愛すること農夫の田、賈子の車にも如かざるなり。」と。執政者 其の言を許すも、心に之を忤う。

註

(一) 都那豎…「国語」楚語上には「使富都那豎贊焉、而長鬣之士相焉、臣不知其美也。」とあり、韋昭注は「那、美也。豎、未冠者也。」と。

現代語訳

郁離子は執政者に、「今の人材登用は、ただ官僚の数を充足しているだけです。それともその人材が確かに才能のあるものと見て、政治を頼められると思われませんか。」と言った。執政者は、「才能によって登用しているだけだ。」と答えた。郁離子は、「もしそうであれば、相國の施政と言葉は一致しておりません。」と言った。執政者が「どういうことか。」と聞いた。郁離子は言った、「私は、農夫が田を耕す時、羊にくびきを負わせず、商人が車を出す時、猪に輓馬の役をさせはしませんと聞きました。なぜなら、事を成し遂げられないことは分かり、失敗させられることを恐れるからです。この所以に三代の士人登用は、必ず勉強させてから官に入れ、必ず政事の才能が

あることを確かめてから登用していました。家柄は一切不問とし、才能の持ち主であれば、身分の低さを見下したりもしませんでした。今の話に戻りますと、風紀を考察している官吏は、国家の耳や目の役に任せたもので、凡庸でない人を選抜しなければなりません。服装や言語ばかりに注目すれば駄目です。（そうしたら）天下の賢者に公平ではありませんし、すべて貴族たちに関係が近くて、都でのんびりしている華美な子弟から選ぶことになってしまいます。それでは、国家への愛は、農夫がその田や商人がその車に持っている愛にも及ばないではありませんか。」と。執政者は対面にその言葉を認めたが、心には納得していなかった。

### 良桐（良い桐） 1.05

原文

工之僑得良桐焉、斫而爲琴、弦而鼓之、金聲而玉應、自以爲天下之美也、獻之太常。使國工視之、曰：「弗古。」還之。工之僑以歸、謀諸漆工、作斷紋焉。又謀諸篆工、作古篆焉。匣而埋諸土、葦年出之、抱以適市。貴人過而見之、易之以百金、獻諸朝、樂官傳視、皆曰：「希世之珍也。」工之僑聞之歎曰：「悲哉世也！豈獨一琴哉、莫不然矣。而不早圖之。其與亡矣。」遂去、入于宕冥之山、不知其所終。

訓読

工之僑、良桐を得て、斫りて琴を作り、弦して之を鼓するに、金

声にして玉に応ず。自ら以て天下の美と爲し、之を太常に献ず。国工をして之を視しむるに、曰く、「古からず」と。之を還す。工之僑 以て帰り、諸を漆工（し）に謀りて、断紋を作らしむ。また諸を篆工に謀りて古い款を作らしむ。匣して諸を土に埋め、葦年にして之を出し、抱へて以て市に適く。貴人過ぎて之を見、之を易ふるに百金を以てす。諸を朝に献じ、樂官伝えて視るに、皆曰く、「希世の珍なり」と。工之僑之を聞きて歎じて曰く、「悲しいかな世や！豈に独り一の琴のみならんや、然らざる莫し。而も早くこれを図らざれば、其れ與に亡びんや。」と。遂に去りて、宕冥の山に入り、其の終はる所を知らず。

現代語訳

工之僑は、良い桐を手に入れて、切って削り、琴を作った。弦を張って弾いてみると、金のようないい音が出て、玉のようによく共鳴していた。天下においても優れたものだと思い、それを太常に献上した。（太常は）この琴を朝廷の琴職人に見せると、彼は、「古いものではない」と言って、琴を（工之僑に）返した。工之僑は琴を持ち帰り、漆職人と謀り、琴にひび割れを入れさせた。さらに篆刻職人に相談し、琴に古そうな穴を開けさせた。箱に入れて土に埋め、一年を経ってからそれを出し、市場に持って行った。貴人は（市場を）通ってこれを見、百金で買った。（貴人が）この琴を朝廷に献上して、樂官たちはこれを回して見て、皆「稀代の逸品かな」と称

えた。工之僑はこのことを聞いて嘆き、「悲しいな。琴だけでなく、すべてのことはそうだ。早めに準備しないと、一緒に滅んでしまふ。」と言った。それで国家を出て、宕冥の山に入り、その後のことは不明である。

巫鬼(巫 鬼) 1.06

原文

王孫濡謂郁離子曰：「子知荆巫之鬼乎？荆人尚鬼而崇祠，巫與鬼爭神，則隱而臥其偶。鬼弗知其誰爲之也，乃蠶于其鄉。鄉之老往祠，見其偶之臥，醮而起焉。鬼見，以爲是臥我者也，歐之踏而死。今天下之臥，弗可起矣，而不避焉，無益、祇取尤耳。」

訓読

王孫濡 郁離子に謂ひて曰く、「子 荆巫の鬼を知るか。荆人は鬼を尚びて祠に崇む。巫 鬼と神を争へば、則ち隠れて其の偶を臥す。鬼 其の誰か之を爲すかを知らず、乃ち其の郷に蠶ふ。郷の老祠に往き、其の偶の臥するを見、醮して之を起す。鬼見て、是れ我を臥す者なりと以為ひ、之を歐ちて踏れて死す。今、天下の臥するは、起す可からず、而して焉を避けずんば、益無し、祇だ尤めを取るのみ」と。

現代語訳

王孫濡は郁離子に言った、「あなたは荆国の巫の鬼のことをご存知ですか。荆の人は鬼を尊んで祠で（鬼を）祀ります。巫は鬼とどちらが靈験があるかを争い、ひそかに鬼の像を横に倒しました。鬼は誰がこんな事をしたか知らず、その村に災いを招きました。村の老人は祠に行つて、鬼の像が倒れているのを見て、祈祷してそれを立たせました。鬼は（老人の行動を）見て、そもそも老人が自分の像を倒したと考え、老人を殴り倒して、殺してしまいました。今、天下も横に倒れていて、立たせられません。これを避けなければ何の益もありませんし、ただ禍いを買うだけです。」と。

亂幾(乱れの幾) 1.07

原文

郁離子曰：「一指之寒弗煖，則及於其手足。一手足之寒弗煖，則周於其四體。氣脈之相貫也，忽於微而至大。故疾病之中人也，始於一腠理之不知，或知而忽之也，遂至于不可救以死，不亦悲夫。天下之大，亡一邑不足以爲損，是人之常言也。一邑之病不救，以及一州、由一州以及一郡、及其甚也、然後傾天下之力以救之、無及於病、而天下之筋骨疏矣。是故天下一身也。一身之肌肉腠理、血脈之所至、舉不可遺也。必不得已而去、則爪甲而已矣。窮荒絕徼、聖人以爪甲視之、雖無所不愛、而捐之可也。非若手・足・指之不可遺、而視其受病以及于身也。故治天下者惟能知其孰爲身、孰爲爪甲、孰爲手・

足・指、而不逆施之、則庶幾乎弗悖矣。」

## 訓読

郁離子曰く、「一指の寒きを燠めずんば、則ち其の手足に及ぶ。一手足の寒きを燠めずんば、則ち其の四体に周くす。氣脈の相い貫くや、微に於いて忽ゆるがせにすれば大に至る。故に疾病の人に中るや、一腠理の知らざるに始まり、或いは知りて之を忽にすれば、遂に救ふ可からざるに至りて死す。亦た悲しからずや。天下の大なるや、一邑の亡くすは以て損と為すに足らず、是れ人の常言なり。一邑の病を救わざれば、以て一州に及び、一州に由りて以て一郡に及ぶ。其の甚だしきに及びて、然る後に天下の力を傾けて之を救ふも、病に及ぶこと無くして、天下の筋骨 疏たり。是の故に天下は一身なり。一身の肌肉腠理、血脈の至る所、挙げて遺ふ可からず。必ず已むを得ずして去らば、則ち爪甲そうこうのみ。窮荒絶徼きゆうかうぜつぎょうは、聖人爪甲を以て之を視す。愛せざる所無しと雖も、之を捐すつるは可なり、手・足・指の遺ふ可からざるが若きに非ざるも、其の病を受けて以て身に及ぶを視る。故に天下を治むる者は、惟だ能く其の孰れか身と為し、孰れか爪甲と為し、孰れか手・足・指と為すを知らば、逆施すること無く、即ち悖もとらざるに庶幾とからんか。」と。

## 現代語訳

郁離子は言った、「一指一本が冷えた場合、温めないと、その寒さ

は手足に伝わる。四肢だけが冷えたけど温めないと、その寒さが全体に回る。(人に) 氣脈が通じているから、細かいところを疎かにすれば、(病が) 大きくなってしまふ。だから病気に襲われるものは、皮膚や筋肉の隙間に発生した異常に気づけず、あるいは気がついてても疎かにするから、だんだん救えなくなって死んでしまふ。悲しいことではないか。人がよく言う、天下は大きいので、邑を一つ失つても構わないと。しかし一つの邑の病気を救わないと、州全体に及び、州より又郡全体に及ぶことになる。(病気が) 酷くなつてから、天下の力で救おうとしても、病根に届かず、天下の筋骨はボロボロになってしまふ。それ故、天下は一つの体である。体にとつて、筋肉から皮膚の隙間まで、血脈が通っているところは、どこも捨てられない。やむを得ず捨てるとしても、爪くらいだけだ。遠くで荒れる辺境を、聖人が爪と看做す。愛さないわけではないけれど、捨てても許容できる。(爪は) 手足や指のように捨てることができないうが、そこが病気になったら体全体に広がるかもしれないのである。だから天下を治める者は、何が体か、何が爪か、何が手足や指かが分かり、倒行逆施をしなければ、(行動は) 道理に通じることに近いだろう。」と。

養臬(臬を養ふ) 1.08

## 原文

楚太子以梧桐之實養臬、而冀其鳳鳴焉。春申君曰：「是臬也、生

而殊性、不可易也、食何與焉？」朱英聞之、謂春申君曰：「君知梟之不可以食易其性而爲鳳矣、而君之門下、無非狗偷鼠竊亡賴之人也。而君寵榮之、食之以玉食、薦之以珠履、將望之以國士之報。以臣觀之、亦何異乎以梧桐之實養梟、而冀其鳳鳴也？」春申君不寤、卒爲李園所殺。而門下之士、無一人能報者。

#### 訓読

楚の太子、梧桐の実を以て梟を養い、而して其の鳳のごとき鳴くを冀ふ。春申君曰く、「是れ梟なり、生まれながらにして性を殊にし、易ふ可からざるなり。食は何ぞ焉これに与らんや。」と。朱英之を聞き、春申君に謂ひて曰く、「君 梟の食を以て其の性を易へずして鳳と爲る可からざるを知る。而して君の門下、狗のごとく偷ぬすみ鼠のごとく竊ぬすむ亡賴の人に非ざる無し。而して君之を寵榮し、玉食を以て之を食らはし、珠履を以て之を薦すすげしめ、將に之に望むに国士の報を以てす。臣を以ての之を觀るに、亦た何ぞ梧桐の実を以て梟を養ひ、而して其の鳳のごとく鳴くを冀ふに異ならんや。」と。春申君寤さとらず、卒に李園の殺す所と爲る。而れども門下の士、一人も報ゆる能ふ者無し。

#### 現代語訳

楚の太子は梧桐の実を梟に与えて飼ひ、(その梟が)鳳のように鳴くことを願っていた。それに対して春申君は、「これは梟です。

生まれながらに鳳とは性質が違っていて、(鳳の鳴き声に)変わるわけがございません。」と言った。朱英はこのことを聞いて、春申君に言った、「あなたは、梟が食物で性質が変えられず、鳳にならないことを知っています。しかしあなたの門客たちは、イヌやネズミのように盗みをする無頼漢ばかりです。あなたは彼らをかかわりがっていて、立派な食事や服装を与え、(彼らに)国士として報いることを望まれています。私から見ますと、これは梟に梧桐の実を与えて、鳳のように鳴くと願うこととは同然どうぜんです。」と。春申君は悟らず、結局李園に殺された。その門客に、仇を討つ者は一人もいなかった。

#### 獻馬(馬を獻ずる) 1.09

#### 原文

周厲王、使芮伯帥師伐戎、得良馬焉、將以獻于王。芮季曰：「不如捐之。王欲無厭、而多信人之言。今以師歸而獻馬焉、王之左右必以子獲爲不止一馬、而皆求于子。子無以應之、則將曉于王、王必信之。是賈禍也。」弗聽、卒獻之。榮夷公果使有求焉、弗得、遂譖諸王曰：「伯也隱。」王怒逐芮伯。君子謂芮伯亦有罪焉。爾知王之瀆貨而啓之、芮伯之罪也。

#### 訓読

周の厲王、芮伯ぜいほくをして師を帥しめて戎を伐たしむ。良馬を得て、將

に以て王に献たてまつらんとす。芮季曰く、「之を捐つるに如かず。王欲に厭くこと無くして、多く人の言を信ず。今、師帰るを以て馬を献げば、王の左右必ず子が得たるを以て一馬に止まらずと為し、皆子に求めん。子以て之に応ずる無くんば、則ち將に王に曉うたへ、王必ず之を信ぜん。是禍いを買ふなり」と。聴かずして、卒に之を献ず。榮夷公果たして使して焉を求むる有り、得ずして、遂に王に譖そりて曰く、「伯は隠すなり」と。王怒り、芮伯を逐ふ。君子芮伯も亦た罪有りと謂ふ。爾、王の瀆とく貨を知りて之を啓くは、芮伯の罪なり。

現代語訳

周の厲王が芮伯に軍隊を率いて西戎を討たせたところ、芮伯は良馬を敵から奪った。芮伯は（この馬を）王に献上しようとしたが、芮季は、「やめた方がいい。王の欲は際限がなく、しかもよく人の言うことを信じる。今、君は軍隊を率いて帰って馬を献上すれば、王の臣下は必ずあなたの獲物がただ一匹ではないと考え、皆求めにくる。君が応じなかったら、彼らは王に告げて、王はきつと信じるだろう。禍いを買うことになる。」と。芮伯は従わず、馬を王に献上した。榮夷公はやはり使者を派遣して（芮伯に）馬を求めたが、馬を得られなかったので、王に芮伯を、「芮伯は戦争の獲物を隠しています」と謗った。王は怒り、芮伯を追放してしまった。君子は言う、芮伯にも罪がある。王が物を好むことを分かっているのに、

それを助長したのは、芮伯の罪だと。

燕王好鳥（燕王 鳥を好む） 1.10

原文

燕王好鳥、庭有木皆巢鳥。人無敢觸之者、爲其能知吉凶而司禍福也。故凡國有事、惟鳥鳴之聽。鳥得寵而矜、客至則群呀之、百鳥皆不敢集也。於是大夫・國人咸事鳥。鳥攫腐以食腥于庭、王厭之。左右曰：「先王之所好也。」一夕、有鴟止焉、鳥群睨而附之如其類。鴟入諱于宮、王使射之。鴟死、鳥乃呀而啄之。人皆醜之。

訓読

燕王は鳥を好み、庭に木有れば皆鳥に巢すくはしむ。人敢へて之に触るる者無し。其の能く吉凶を知りて禍福を司ると為すなり。故に凡そ国に事有らば、惟だ鳥の鳴くを聴く。鳥寵を得て矜おこる。客至れば則ち群がりて之を呀ぎ、百鳥皆敢へて集はず。是に於いて大夫・國人咸みな鳥に事ふ。鳥腐を攫いて以て腥きを庭に食らふ。王之を厭ふ。左右曰く、「先王の好む所なり」と。一夕に、鴟とび焉に止まる有り。鳥群がりて睨み、之に附くこと其の類の如し。鴟宮に入りて諱とがぶ。王之を射しめ、鴟死す。鳥乃ち呀ぎて之を啄つむ。人皆之を醜む。

現代語訳

燕の王はカラスが好きで、庭に木があればすべてカラスに巢を作らせた。(国民は)誰も王のこの好みに触れることができなかった。カラスは吉凶が分かり禍福を司ると思われていたからである。それ故国家に何かが発生したら、ただカラスの鳴き声だけを聞いた。カラスは寵愛を得て傲慢になった。客が来ると群れてアーと鳴いて、他の鳥は敢えてここに集まることがなかった。こうして大夫から国民まで、皆カラスに仕えた。カラスは腐ったものを掴んできて、生臭いものを庭で食べた。(新しい)王がそれを嫌がっても、左右の臣下は、「先代の王はお好みでした」と言った。ある夕方に、鴟が庭に止まった。カラスたちは群れて鴟を睨んで、仲間と見なしているように近づいた。鴟が飛んで鳴きながら宮殿に入ると、王は(臣下に)それを射させた。鴟が死ぬと、カラスはアーと鳴いてその死体を啄んだ。人々はそれを醜いと思った。